

平成26年度企画展Ⅲ

蚕の懐古展 3

冬の縁側と 養蚕農家

高崎市歴史民俗資料館

◆ 縄ない機(足踏み式製縄機)

縄をなう(絢う)＝藁縄を編む

古くから、ワラ縄は神社や農業および生活に必要不可欠のものでした。縄編みは手作業で行っていましたが、手編みの作業には熟練技術と経験が要求されることから、作業負担が大きく、たいへん難しい作業でした。そこで、明治時代末期に縄ない機が開発されて、使用方法が簡単な足踏み式製縄機が広く普及したことから、手編みの作業負担が軽減されました。

佐賀県佐賀郡の宮崎林三郎は、「縄ない機こそが農家に幸福を与える」と製縄機開発に生涯を捧げ、明治38年(1905)に完成したことから「製縄機の開祖」と呼ばれています。その後、改良が重ねられ、部品交換により縄の太さを自在に調整できる製品や三つ編みができるものも開発されました。現在では、合成紐が開発されてワラ縄の需要は少なくなりました。

- 1 稲ワラの葉やワラくずを取り除いて、茎の部分を取り出す。
- 2 乾燥していると硬くて加工しにくいので、ワラを濡らす。
- 3 縄をしなやかで強くするために、ワラ打ちをする。
- 4 縄ない機の2つのラッパ管でワラをよじる。
- 5 ドラムフレームが回転してワラがねじられる。
- 6 ドラムで縄を引っ張りながら巻き上げる。



縄ない機(部分)

◆ 回転マブシ用毛羽取り機(回転蔴用毛羽取機)

毛羽をとる(取る)＝回転蔴の毛羽を取る

蚕が繭をつくるときに足場として最初に吐く糸は、繭の外側を覆っている真綿のような糸で「毛羽」と呼ばれます。これは生糸にはならない糸で、繭の収穫後に繭から取り除かれますが、「回転マブシ」(回転蔴＝蚕の上に登る習性を利用して、効率的に繭を作らせる回転式の繭棚)にも毛羽が残るため、取り除いて手入れをする機具が毛羽取機です。この作業は農閑期に行われました。

- 1 たたんだ回転まぶしを動かしながら毛羽取り機に当て、ゴム製のベルトに毛羽を巻き取る。
- 2 毛羽取り機の毛羽を除去する。

◆ 真綿かけ器

真綿をかける(掛ける)＝真綿(角真綿)を作る

- 1 煮た繭をぬるま湯の中で袋状に広げる。
- 2 内側を裏返し、中のサナギと脱皮した皮を取り除く。
- 3 真綿掛け器に5、6枚重ねて乾かす。



真綿かけ器

◆ 洗い張り

洗いばり(張る)＝着物や布の洗濯法

着物を解いて反物の状態に戻して洗い、フノリを引いて、湯のしや「伸子(針のついた竹ひご)」で反物の幅を整えることを洗い張りといいます。水洗いして汚れと糊を落とし、新たにフノリを引くことで生地を風合いを蘇らせることができます。一般家庭で主に木綿や麻、目の詰まった紬などの普段着を洗うために行われました。着物一着分に張り板が4枚必要です。身頃は長いので、板の表裏に渡して張ります。

「伸子張り」は主に絹を洗うために行います。また、生地を張って整えながら糊付することで、縫製で付いた筋などを消すことができます。表を下にし、下から伸子を差込んで、裏からフノリを刷毛で塗ります。

- 1 汚れた着物や傷んだ布を解く。
- 2 水洗いし、張り板や伸子に布を張り、糊付けしてシワを伸ばす。
- 3 乾いたら、はがして仕立て直す。

◆ カゴとザル

竹籠をあむ(編む)＝細く割った竹で籠^{かご}や笊^{ざる}を作る

竹は昔から、強く、しなりと弾力があることから、加工しやすい素材として利用されてきました。竹カゴや竹ザルには、様々な編み方があります。

カゴ編み

ゴザ目編み・四ツ目編み・六ツ目編み・網代編み・亀甲編み(鉄線編み)・松葉編み・麻の葉編み・輪口編み(輪弧編み)・やたら編み・ねじり編み・クモの巣編み・千代田編み・片締め編み・櫛目編み・石畳編み・五ツ目編み(キキョウ編み)・ハツ目編みなど

底編み 菊編み・網代底編み・四ツ目筏底編み 巻縁 (苳の竹を別の竹で巻いて仕上げる)千段巻縁・矢筈巻縁・返し巻縁

当縁 (竹ヒゴを重ねて数カ所を縛って固定する)

- 1 基盤となる竹を放射状に重ねる。
- 2 薄くはいだ竹を中心から外に向かって互い違いにする。
- 3 用途によって、さまざまな編み方を使い分ける。

◆ 「俵」と「棧俵」

俵と棧俵をあむ(編む)＝俵^{たわら}と棧俵^{さんだわら}を作る。俵は円柱状の側面の菰、俵の底と蓋になる円い棧俵^{こも}をそれぞれ編み、最後につなぎ合わせて作る。

- 1 稲ワラをしごいて揃え、木製の編み機を使い、経糸に当るワラ縄の向きを交互にして菰を編む。
- 2 ワラ束の中央を縛り、踏みつけて円盤状に広げて端を編みこんで、底と蓋になる「棧俵」を作る。
- 3 菰を丸め、端を編み合わせて筒にする。
- 4 端を内側に織り込み、棧俵を縫い込んで底を作る。
- 5 中に定量の米などを詰め、棧俵で蓋をする。
- 6 底と蓋を、網状に編み上げた縄で外れないように押さえる。
- 7 胴を数カ所、ワラ縄できつくくり上げる。

棧俵



◆ わらマブシ

マブシをおる(織る)＝蔀^{まぶし}を編む

マブシは蚕の繭の大きさや形を揃えるために考案された養蚕具です。古くは小枝を束ねたものや松葉・笹・茅・菜種殻などの植物が利用されていましたが、吸水性の良い稲ワラを折り曲げたマブシが主流になり、質の良いサイズのそろった繭を作ることができるようになりました。しかし、このワラマブシは使い捨てで、毎年作らなくてはならないことから、大正時代に繰り返し何度も使える改良マブシが作られ、さらに昭和10年代にマス目に区切ったボール紙製の回転マブシが登場しました。マブシは蚕カゴの上に広げて使っていましたが、回転マブシは蚕が繭を作るときに高い場所に上がる性質を利用して天井から吊り下げ、蚕の動きに合わせて自然と回転するように繭を作らせやすくしたものです。また、フンや小便が下に落ちるので、他の繭を汚すことが少なくなりました。マブシの改良や開発により、労働負担が軽くなり、より良質の繭を作ることができるようになりました。

蔀の変遷

島田蔀

明治時代初期に主力となった稲ワラの蔀。一定間隔に交互に折り曲げて、ジャバラに折りたたんでマブシを作ります。簡単な手折りのマブシで、農閑期に一人1日200個くらい折ったといえます。折り機に一つかみのワラを横に広げてのせ、二本の棒を使って台の幅に合わせて交互に折り曲げます。マブシはしっかり結わえて折り癖を付けます。島田マブシの名称は、その形が昔の女性の髪形である「島田髷」の形に似ていることによります。

このワラ蔀を蚕の上に広げ、その上に数本のワラを軽く乗せて繭を作らせます。費用のかからない手近なワラを使用して簡単に作れることから、戦後までの長い間使用されましたが、使い捨てで毎年作らなくてはならず、広げるのに労力もかかり、しかも波形のワラの山が倒れやすいため、不安定で繭を収穫するのに時間もかかりました。

蔀折機

明治後期に発明された量産可能なマブシ折機は、上部にワラをはさみ入れ、ハンドルを交互に操作してワラを折り曲げながら下へと押し込み、できあがったものを下に落とす仕組みです。これにより手軽に早くマブシを作れるようになりました。

回転蔀

昭和4年に市販されたボール紙で作った区画マブシで、小枠を10個一組として大枠に固定し、天井から吊り下げて使います。これにより、作業効率が上がリ、繭の質も向上し、繭かさもよくなりました。



島田蔀(まぶし)折機

蔀折機

改良蔀

大正末期に考案された、俵編み機に似た改良マブシを編むためのマブシ折機で作ったマブシ。金具にワラを引っかけてV字をつなげた形に編んだものです。折りたたんだり広げたりする作業も簡単で、繭を作る空間も十分にできるため、農家で広く使用されました。



改良蔀編み機

◆ ムシロ

筵をおる(織る)＝筵を編む

ムシロはおもに敷物として用いられます。特に穀類を天日で干すのに欠かせないものでした。ムシロを織るのに使われた「筵機」は、基本的には織物の機の原理と似ていますが、「筵を編む」ともいうことから、「筵編み機」とも呼ばれています。手作業で編むもの、足踏み式のもの、動力で動かすものがあります。

- 1 経縄となる細い縄を「箴」に通して「筵機」に掛け、編物に使うカギ針のような道具で経縄の間にワラを通していく。
- 2 箴を使って、通したワラを下に打ち付けるようにして編んでいく。

◆ ネコ

猫(ねこ・猫伏)をかく(掻く)＝縄で編んだ厚い筵を作る。

◆ もみ殻焼き器

籾殻をやく(焼く)＝焼き籾を作る

稲の籾殻を蒸し焼きにして炭化させたもの。多孔質であるため、通気性を改善し、水分の吸着作用があります。養蚕においては、湿気を吸収し、蚕の病気を予防するために籾を焼いて使用します。農作物には肥料として使用する場合もあります。

- 1 籾殻を積み、中央部分に穴を掘り、木片を入れて燃やす。
- 2 籾殻用の煙突をかぶせる。
- 3 煙突の周りが焼けたら、上下の籾殻と入れ替える。

◆ 練炭

練炭をつくる(作る)＝炭の粉を固める

練炭は大規模な工場で製造されますが、養蚕農家では自家用に作ったり、小規模な商店が作ったりする場合も多く、練炭成形器も市販されていました。練炭は石炭や木炭などの炭類を、フノリを使って固め、円筒状の練炭成形器に入れて、掛矢でたたいて作りました。

◆ 切り餅

のし餅をきる(切る)＝押し餅を切る

養蚕農家では、のし餅を切るのに桑切り包丁を用いていました。

◆ 干し柿と干し芋

柿や芋をはす(干す)＝干し柿と干し芋を作る

渋柿は皮をむき、紐で吊るす。サツマイモは熱を加えて切り、乾燥させる。

◆ 里芋の毛羽取り器

里芋の毛羽をこする(擦る)＝里芋の毛羽を取る

里芋と水を樽に入れ、木製の2枚の板を中央で結んで「×」にした専用の道具で、両手で交互に反転させて毛羽をこすり取ります。

◆ 座繰り器(糸引き器・糸取り器)

繭から糸をとる・ひく(取る・引く)＝座繰り器で糸にする

鍋で煮た繭を手回しの小枠に巻き取る「座繰り器」による製糸方法です。座繰りは、歯車仕掛けの木製の簡単な糸繰りの道具です。近代に入り、器械製糸の普及とともに改良座繰り(足踏み法)が普及し、座繰り生糸が高価な値段で取引されて農家の副業となりました。特に碓氷社など、組合製糸の普及した群馬県では、明治中期まで主要な製糸の道具として用いられ、長く使用されていました。

- 1 鍋に湯を沸かし、繭を煮る。
- 2 トウモロコシの穂で作った小ホウキで繭から糸口を見つけ、繭一粒から1本の糸を取り出す。(ポイント：湯が冷めないようにする)
- 3 座繰り器に何本かの糸を合わせて巻き取らせる。(糸の太さは本数によって調節できる)

◆ 落花生炒り器

落花生をいる(炒る)＝落花生を炒る

天日干した落花生は、食べる都度、炒りました。落花生は長期保存できることから、農家では自家用によく栽培されていました。

- 1 落花生炒り器をカマドにのせ、火を燃やす。
- 2 天日干した生の落花生を入れ、ハンドルをゆっくり回して落花生を炒る。

◆ その他の展示品

花嫁衣裳、経台、糸車、牛首、寺子屋机、茶器、蓑草履、製麺機、
捏ね鉢、回覧板、下駄、砥石、くけ台、編み機、煙草盆、
バリカン・風呂敷、洗面器、蠅叩き

高崎市歴史民俗資料館

〒370-0027 群馬県高崎市上滝町1058 tel/fax : 027(352)1261
E-mail : rekimin@city.takasaki.lg.jp
URL : <http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121900362/>

- ① JR高崎駅西口(群馬中央バス) 県立女子大行き約30分「慈眼寺裏」下車徒歩3分
- ② JR高崎駅東口(群馬バス) 亀里JAビル行き約20分「下滝西」下車徒歩8分
- ③ JR高崎駅東口(ぐるりん) 群馬の森線「滝川郵便局入口」下車徒歩15分
- ④ 関越自動車道(高崎 IC)5分

